

染付ブルー&ホワイト

染付とは、白地に青の絵柄のみで構成された日本の陶磁器のスタイルのこと。この青色は、コバルトを多く含む鉱物の集合体である呉須を用いて伝統的に作られている。元々、根本家の例のように、作家が手で絵柄を刷毛で描いていた。しかし、20世紀初頭には、ステンシルや銅版転写などの技術が導入され、大量生産が可能になった。

型紙は、和紙に絵柄を描いた後、柿から作られた渋い染料で処理する。この処理により、型紙の強度と防水性が向上し、繰り返し使用することができる。(下の写真は処理した型紙) 次に、素焼きの作品の表面に処理した型紙を置き、顔料を刷り込む。下の写真は、富士山(左)と桜(右)の型紙を使用している。

銅板転写は、スタンプのような機能を持つ凹版を使用する。絵柄を彫った銅板に顔料を塗り、余分な部分を拭き取る。この銅板の上に吸水性のある薄い紙を置き、プレス機にかけることでデザインを紙に転写する。石鹼を使ってビスク焼きの表面にこのプリントを成形し、しっかりとこすって顔料を磁器に転写する。最後に水洗いをして、色のついたデザインを残しつつ、壊れやすい紙を洗い流す。下の皿に描かれている石灯籠や牡丹、カルタのモチーフなどはこの方法によって制作されたものである。